

平成 18 年度国土施策創発調査

「環境資源のウィズユースによる地域コミュニティの  
再生と持続可能な地域づくりに関する調査研究」

報 告 書

平成 19 年 3 月

環境省総合環境政策局

秋 田 県



# はじめに

本プロジェクトは、荒廃する日本の農山漁村と地方都市の再生を主たる研究課題としたものである。東京への一極集中がとどまることをしらない中、地方の農山漁村と地方都市は衰退の一途をたどっている。しかし、日本の活力の原点はこの豊かな日本の風土とその上に立脚した日本の農山漁村である。日本の農山漁村の崩壊はとりもなおさず日本文明の衰亡をも意味する。この地方の活力をどのように再生し復活するかが、今の日本にとってのもっとも重要な政策課題の一つである。

## <環境資源のワイズユース>

本プロジェクトで地域再生の切り札にするのは、「環境資源のワイズユース」である。日本の農山漁村や地方都市には数千年にわたって築かれてきた美しい自然風土、豊かな水資源、伝統文化、伝統工芸、芸能、祭り、自然との関わりの叡智、人と人の関わりのコミュニティのあり方など、目には見えないが日本人の活力の源になる地域の環境資源がある。本プロジェクトが目指すのは、こうしたこれまであまり注目されなかった環境資源を、21世紀の地域再生の活力源とみなして、環境資源を賢く利活用（ワイズユース）することによって、地域を再生し、日本の底力を覚醒させることである。

## <ローカルをグローバルに直結させる>

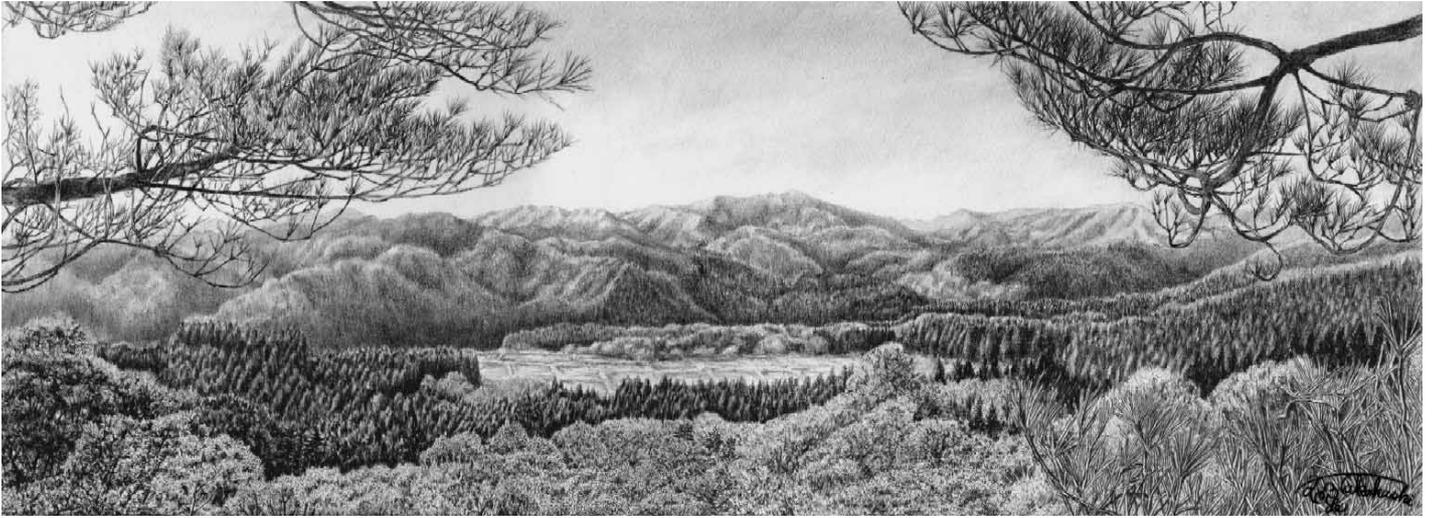
しかし、こうしたローカルな環境資源のワイズユースがローカルのままで終わったのでは、住民には力が湧いてこない。ローカルな地域がグローバルな世界と直結していることを住民自身が実感してこそ、はじめて環境資源のワイズユースの効果が発揮されるのである。

そのためにアジア太平洋の諸地域との比較研究を実施することが必要不可欠である。ローカルがローカルのままで終わってしまったのでは元気がでないのである。これまでの地域再生のプロジェクトの限界はここにある。地域再生のプロジェクトがせいぜい一村一品運動でとどまっていたのはそのためである。

これまでの地域再生のプロジェクトが国家戦略はるか、新たな持続型文明社会の構築という、本プロジェクトが掲げる大きな目標にまで到達できなかったのは、ローカルがローカルのまま終わっていたからである。ローカルな叡智が実は日本の国家戦略のみでなく世界と人類の平和と繁栄につながることを、21世紀の地球環境問題の解決と持続型文明社会の構築に大きく貢献できることを、地域がしっかりと自覚することによって、はじめて地方の活力がうまれてくるのである。ローカルこそグローバルな世界と今や直結しているのである。

平成19年3月

環境資源のワイズユースによる地域コミュニティの再生と  
持続可能な地域づくりに関する検討委員会  
委員長 **安田 喜憲**〔国際日本文化研究センター教授〕



「窓山」の風景（秋田県能代市） 鉛筆画家 高橋郁衣 作

## 「ワイズユース」に託す思い

わたしたちが暮らす秋田は、豊かな自然にめぐまれています。

わたしたちの祖先は、食糧も燃料も、家も生活の道具も衣類も、たいていのものは近くの森や川や海や田畑から得られるものを使って暮らしてきました。その長い歴史の中で、自然の恵みをうまく使う知恵や技術を培ってきました。わたしたち自身も、少し前までは炭や薪を使い、地元でとれた農作物や魚を食べ、自然と深くかかわる生活をしていました。

今はどうでしょうか。

暖房器具や様々な電化製品など便利な道具がたくさんでき、暮らしは大きく様変わりしています。

かつては、自然をあがめ、自然に感謝し、時には自然をおそれ、鎮めるような様々な行事やきまりごとが数多くありましたが、わたしたちには、どのように生活が便利になっても、この気持ちだけは次世代に継承していく義務があるように思えます。

わたしたちの住むこの地域が、これからも活気があって暮らしやすい場所であるために、わたしたちはもう一度、地域の知恵や技術を見直して、身の回りの山や川や海や田畑をうまくつかっていくことができないか、わたしたちの祖先からうけついできた知恵や技術を、そして身の回りの豊かな自然を、今の時代にあったかたちでいかすことはできないか、考えてみたいと思います。

# 目 次

はじめに

要約編 ..... 1

本編

第 1 章 調査研究のねらいと背景.....	13
1 . 調査研究のねらい .....	13
2 . 調査研究の枠組み .....	13
3 . 調査研究の項目及び手順 .....	14
4 . 調査研究の対象とする地域 .....	15
5 . ワイズユースの定義と背景 .....	16
( 1 ) 環境資源のワイズユースとは .....	16
( 2 ) 今なぜ秋田でワイズユースなのか - 調査研究の背景認識 .....	16
6 . 検討の体制 .....	17
第 2 章 本地域の環境資源 - その特性と課題.....	21
1 . 地域資源の範囲 - 私たちがとらえたいもの.....	21
2 . 豊かな森と水の自然資源	
- 変わらないもの、失われつつあるもの.....	23
( 1 ) 多様で奥深い自然 .....	23
( 2 ) アンケートから見た地域の自然資源 .....	43
3 . 有形無形の歴史的資源 - 存続が危ぶまれる地域の歴史文化.....	44
( 1 ) 本地域固有の歴史的資源 .....	44
( 2 ) アンケートから見た地域の歴史的資源 .....	50
4 . 自然と共生する生活文化 - 変わりつつある暮らし.....	51
( 1 ) 先人からの知恵を受け継ぐ生活文化 .....	51
( 2 ) 白神山地における藩政時代の山村利用のルールと知恵 .....	55
( 3 ) アンケートから見た地域の生活文化資源 .....	59
5 . 環境資源を守り育てる地域社会の実態.....	61
( 1 ) 止まらない人口減少・高齢化 .....	61
( 2 ) 進まない産業の高度化 .....	63
( 3 ) 地域の将来は縮小・衰退傾向と予想 .....	65
6 . 地域の環境資源に関わる新たな動き .....	66
( 1 ) エネルギーの有効利用 .....	66
( 2 ) 地域を振興する施策 .....	69
( 3 ) 地域を元気にする活動 .....	72
( 4 ) 地域住民の活動状況 .....	73
7 . 地域の環境資源の現状から見た課題 .....	75

第3章	地域環境史調査	77
1.	年縞がもたらす新たな価値観	77
2.	年縞堆積物から得られる地域の環境史	78
(1)	年縞堆積物による古気候復元の分解能と精度	78
(2)	湖沼における年縞の形成メカニズム	78
(3)	一ノ目潟の年縞の層相・堆積年代	79
(4)	放射性炭素年代測定結果	84
(5)	一ノ目潟の年縞の葉理構造の特徴	84
(6)	一ノ目潟の年縞(深度5.00~7.00m付近)の層序と解析結果	90
3.	地域の歴史と環境史のかかわり	94
(1)	二ノ目潟の年縞とその特徴	94
(2)	地域の歴史との関連	97
(3)	今後の取組	98
第4章	ワイズユースを実現するために	
	- 秋田から発信するワイズユースモデル	99
1.	ワイズユースモデルの基本的考え方	99
2.	個別モデル	100
(1)	男鹿年縞モデル	103
(2)	白神森と海の連携モデル	113
(3)	小坂産業観光モデル	117
(4)	粕田伝統芸能復活モデル	121
(5)	食と農の交流ビジネスモデル	125
(6)	常盤体験型ツーリズムモデル	129
(7)	八郎太郎伝説モデル	133
(8)	阿仁マタギの知恵モデル	137
(9)	八九郎温泉サポーターモデル	141
3.	3つの視点からとらえたワイズユースのあり方	145
(1)	環境教育の視点からのワイズユース	145
(2)	経済活性化の視点からのワイズユース	151
(3)	「環境共生型地域づくり」の視点からのワイズユース	159
4.	環境資源のワイズユースによる持続可能な 地域づくりに向けて(全体モデル)	161
(1)	ワイズユースで目指すもの	161
(2)	ワイズユースを実現するためのポイント	162
(3)	ワイズユースの進め方	165
(4)	ワイズユースの全体モデル	167
	おわりに	168